

霊的に成長するための挑戦 第一ペテロ 1 章 21-25 節

ペテロの手紙 #32

ロバート・D・ルギンビル博士著

第一ペテロ 1 章 22-25 節

(22) あなたがたは今、真理に従うことによって心を聖別したのだから、兄弟愛が偽りのないものとなるよう、互いに固く愛し合いなさい。(23)[なぜなら、あなたがたは]朽ちる種からではなく、永遠に生きて存続する神のみことばによって、新しく生まれたからである。(24)[[イザヤ 40 章 6 節](#)後半, [40 章 8 節](#)にあるように]「すべての肉なる者は草のようであり、その栄華はすべて草の咲かせる花のようである。草は枯れ、その花は地に落ちる。(25) しかし、主のみことばは永遠に存続する」。これこそ、あなたがたに伝えられた良い知らせのみことばである。

はじめに： 個々の節の釈義に進む前に、この四節を貫く中心的な主題は、信者が救われた後も、救いへと導いたのと同じ良い取り組み方と歩み方を続け、それによって成長し、前進し、主のために実を結ぶ必要があるということである、と指摘しておくべきでしょう。私たちは今、真理によって神の御前で聖なる者とされ、聖別されました——すなわち、立場上の聖別です(福音を信じることによって、恵みにより救われたのです)。そして、それ以後も同じようにクリスチャンとしての歩みを進めることが私たちに求められています。すなわち、同じ神のみことばを信じ、それを適用することによって、**経験的**聖別を追い求めることです。それによって、キリストと共に歩む私たちの行動と、その御体である教会に仕える私たちの働きが、今や「キリストにある者」として私たちが持っているすばらしい立場にふさわしいものとなるためです。

私たちを救ったみことばという同じ種こそ、今や私たちが、自分の人生に対する主のみこころを成し遂げるために、引き続き細心の注意を向けなければならない神のみことばそのものです。なぜなら、この世にある真理以外のすべてのものは取り除かれてしまっていますが、神のみことばは永遠に存続するからです。私たちもまた、その同じ神のみことばによって新しく生まれたのですから、愛する主と共に永遠に存続します——そして救いの後も、みことばに注意を払い続け、それを自分の人生に適用することによって勝ち取った報いを、永遠に楽しむことになるのです。

しかし、あなたがたが到達したところに応じて、**同じ道を**(すなわち、真理を受け入れ、信じ、適用することによって)歩み続けよう。([ピリピ 3 章 16 節](#))

(6) それゆえ、あなたがたが[初めに]主キリスト・イエスを受け入れたのと全く同じように、[まさにその同じ方法で]彼にあって歩みなさい。(7) 彼に根ざし、彼にあって建てられ、教えられたとおり信仰に堅く立ち、感謝にあふれなさい。
([コロサイ 2 章 6-7 節](#))

聖別された心：私たちはすでに、聖別と聖さ(神学的には同義語)が、罪と悪から分離されることに関するものであることを見てきました。神は完全であり、罪と悪から絶対的に分離しておられます。ですから、その御名によって召された者たちもまた、そのようであるべきです。私たちはイエス・キリストを信じる時、**身分的な意味で**聖別され、聖なる者とされます。新しく生まれた時、神は私たちを聖なる者、聖別された者、そして今や神と御子に永遠に属する者として、この世から取り分けられた者と見なされます。当然ながら、救いの時点で、私たちは現在の一時的な体に巣食っている罪の性質を取り除かれるわけではありません。そのため、「この朽ちるものが朽ちないものを着る」復活の時までは、実際の意味で罪から完全に解放されることはありません([第一コリント 15 章 53 節](#))。愛する主の再臨の時に、この祝福された望みが成就することによって、私たちの**最終的**聖別が実現します。その時、私たちは主がそうであられるのと同じように、永遠に完全に聖なる者となるのです。

救いと永遠との間、この悪魔の世において、すべての信者には「聖化を追い求め」([ヘブル 12 章 14 節](#))、「神を恐れて全く清くなる」([第二コリント 7 章 1 節](#) /NKJV 訳)ことが求められています。これは神学的に「経験的聖別」と呼ばれるものであり、イエス・キリストを信じるすべての者が日々携わるべき、聖さを追い求める歩みのことです。

しかし、すでに見てきたように、私たちが身につけ、この世に示すべきこの聖さは、単なる外見上の問題ではありません。それは単なる演技であってはならず、私たちの箇所の言葉で言えば「偽善的」であってはなりません。昔のパリサイ人たちがそうであり、今日のさまざまな律法主義的集団もそうです(「偽善」という語はギリシヤ語に由来し、語源的には「演技をすること」を意味します)。むしろ、真の聖別とは、主に対する本物の愛から生じる、主に喜ばれる生活を形成していくことです。さらに私たちは、こうした本物の聖別(単に外見上「聖く」見える振る舞いとは対照的なもの)は、外側だけを整えることによって成し遂げることはできないということも見てきました。私たちの主が「白く塗った墓」と呼ばれたパリサイ人たちのように、あるいは、内なる人を実際には変えないまま、目立つ特定の行動だけを避ける律法主義的集団のようにです(しかも、その行動自体が場合によっては罪ですらないこともあります)。本物の、神にかなった聖別と真の聖さは、内側から外側へとしか形成され得ず、決して外側から内側へと形成さ

れるものではありません。本当に聖くあるためには、主イエス・キリストと非常に近く歩まなければなりません。そしてそれは、霊的成長によってのみ可能です。すなわち、神のみことばの真理を学び、それを心から信じ、そして御霊によってそれを日々の歩みに適用することによってです。だからこそペテロは、この 22 節で、真の聖別が行われる**場所を「あなたがたの心」と明記し**、また、この手紙の受け手たちがすでにそれを行っていた**手段も、「真理に従うこと」**によってと明記しているのです。つまり、本物の聖別を追い求めるには、私たちの内側、心の中が変えられなければならない、それは神のみことばとその真理を学び、信じ、自分の生活に適用することによってのみ成し遂げられるのです。

(14) わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。この世は彼らを憎みました。彼らは、わたしがこの世のものではないように、この世のものではないからです。(15) わたしがお願いするのは、彼らをこの世から取り去ることではなく、悪しき者から守ってくださることです。(16) 彼らは、わたしがこの世のものではないように、この世のものではありません。(17) どうか、**あなたの真理によって**彼らを聖なる者としてください(すなわち、「聖別してください」)。**あなたのみことばは真理です**。(18) あなたがわたしをこの世に遣わされたように、わたしも彼らをこの世に遣わしました。(19) 彼らのために、わたしは自分自身をささげます。それは、彼らもまた**真理によって**聖なる者とされる(すなわち、「聖別される」)ためです。(ヨハネ 17 章 14-19 節)

ペテロの手紙が読み上げられるのを最初に聞いた人たちは、疑いなく皆、信者でした。ですから、少なくとも彼らは、新しく生まれた時に、その心が**身分上**聖別されていました。しかし、信者にとって、この世の人生においてそれで終わりではありません。私たちは救われた後も、ある目的のためにこの世に残されています。そのためペテロは、読者たちに、クリスチャン生活の次の段階へ進むよう勧めているのです。すなわち、最大の戒めである愛を実践することによって、主との歩みにおいて霊的に前進することです([第一コリント 13 章 13 節](#))。

兄弟愛が偽りのないものとなるよう、互いに熱心に愛し合いなさい：主が[マタイ 22 章 36-40 節](#)で教えておられるように、律法全体とすべての預言者は、最大の戒め、すなわち、心を尽くして主を愛することにかかっています。また主は、同じ文脈で、その第二の戒め——本質的にはそれと対をなすもの——は、「自分自身のように」隣人を愛すること(とりわけ、仲間の信者を愛すること)であるとも教えておられます。ここで徳としての愛を勧めるにあたり、ペテロは主への愛よりも、キリストにある兄弟姉妹への愛(すなわち フィラデルフィア philadelphia、「兄弟愛」。「互いに愛し合いなさい」という言葉

からも明らかです)に重点を置いています。それは、同じ使徒であるヨハネが私たちに、「目に見える兄弟姉妹を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできません」と語っているからです([第一ヨハネ 4 章 20 節](#)/NIV 訳)。私たちの内にあるすべてをもって主を愛するという第一の徳を実際に示そうとするなら、キリストにある兄弟姉妹を愛することは絶対に欠かせない前提条件なのです。

キリストにある仲間の信者たちに対するこの互いの愛は、単なる演技、見せかけ、偽善によって行われるものであってはならず、実際、そのようなものであることはできません。イエスにある兄弟姉妹への本物の愛は、単なる受け身の口先だけのものではありません。イエスに愛するということの意味が大きいことを明らかにするために、ペテロは、互いに愛し合うよう命じる中で、それを「熱心に」行うよう付け加えています(ギリシヤ語 *εκτενως*、すなわち「限界まで引き伸ばして」)。困っている人に、「安らかに行きなさい、暖まって、腹いっぱい食べなさい」と言うことは、愛があるように見えるかもしれませんが([ヤコブ 2 章 16 節](#))、ヤコブがそこで語っているように、そのような空しい言葉には「何の益もありません」。ですから、ペテロがここで私たちに語っているのは、仲間のクリスチャンに対する私たちの態度をどう持つかということだけではありません(もちろん、それもその一部ではあります)。この勧めにおける彼の本当の重点は、いわば「言うだけでなく、実際に行動で示す」よう私たちに求めることにあります。ヤコブの例で言えば、それは、物質的な必要にある兄弟姉妹を実際に助けることを意味します。

大部分の場合、私たちが兄弟姉妹に与える最も効果的な奉仕は、自分の霊的賜物を正しく用いることによってなされます……それによって、キリストの御体が、本来意図されているとおりに機能し、それぞれの部分が、ほかの部分に欠けているものを補うのです。実際、賜物には多くの種類があり、賜物の組み合わせにも多くの種類があり、まして奉仕にはさらに多くの種類があります(そして、この点について、目に見える伝統的教会が認めているものだけを考えるようになっては決してなりません)。ですから、すべての信者は(可能であり、本当に必要としている人がいるなら)与え、祈り、励ますべきですが(たとえば)、私たち一人一人には、イエス・キリストご自身によって選ばれた特別な奉仕の領域があります。それは、私たちが御霊から受けた賜物の組み合わせと完全に調和しており、その働きの結果は父によって定められています([第一コリント 12 章 4-6 節](#))。そして、これをこの章の文脈で考えるなら、その意味するところは、奉仕によって兄弟姉妹を助け、実際に効果のある仕方でキリストにある兄弟姉妹を愛することができるところまで到達するためには、霊的成長と前進を続ける必要があるということです。クリスチャンとしての前進の過程の頂点——すなわち、すべての信者に対して、熱心で、偽善のない愛を実際に示すところ——を強調することによって、ペテロは暗に、その祝福された地点に到達するために必要なことをすべて行うよう私たちを励ましてい

ます。すなわち、神のみことばの真理によって成長し、その真理を適用することによって生じる試練を通過しつつキリストとの歩みにおいて前進し、そしてついには、私たちがこの地上に置かれ、御霊によって賜物を与えられた目的である奉仕を始めることによって、ほかの人々を助けることができる場所にまで到達することです。そこにおいて私たちは、「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛せよ」という最大の戒めを、本当の意味で実行し始めることができますのです([ルカ 10 章 27 節](#)/NKJV 訳; [申命記 6 章 5 節](#); [マタイ 22 章 37 節](#)参照)。

朽ちる種からではなく、永遠に生きて存続する神のみことばによって新しく生まれた：
種をまく人のたとえの中で、私たちの主も同じように、神のみことばを種にたとえておられます。そのたとえでは、みことばは芽を出す場合もあれば(それに応答する人々の中で)、芽を出さない場合もあります(応答しない不信者の場合)。そして、応答する人々についても、その種がしおれてしまうことがあります(信仰から離れてしまう人々)。あるいは、雑草にふさがれてしまうこともあります(この世の心配事によって、霊的成長、前進、実りが妨げられることを許してしまう人々)。あるいは、良い地に落ちて豊かな実を結ぶこともあります(救われた後もみことばに応答し、最後まで真理にとどまり続ける人々)。

信者たちに語りかけながら、ペテロは読者たちに、神のみことば、特に、イエス・キリストご自身と、私たちの罪を取り除くために十字架上で成し遂げられたその御業を信じることによる救いの良い知らせこそが、彼らが神との関係に入るための手段であったことを思い起こさせ、今やこれからも同じ神のみことばを受け入れ続けるよう励ましています。神のみことばという永遠の種が、永遠において何の益もない朽ちる種(この世においては目的を持っているとはいえ)にはるかに勝っているのと同じように、私たちのこの世における物質的・身体的な心配事も、今ここではある程度必要であるとしても、永遠においては重要ではなくなります。私たちは、最初に福音の真理を喜んで受け入れ、信じる時、その事実を受け入れています。ですから、その原則を持ち続け、「同じ道を歩み続ける」(ピリピ 3 章 16 節)、すなわち救われた後も真理のみことばに注意を向け続けるべきなのです。なぜなら、それこそ「永遠に生きて存続する」種だからです。私たちの今の肉体も、この世で持っているすべてのものも、今日ここにあって明日にはなくなる「草」のようなものです。しかし、私たちには、この世が目にしていないむなしさよりもすぐれた望みがあります。私たちが新しく生まれるために用いられた種が朽ちることなく永遠であるように、主が戻って来られる時、私たちも朽ちることのない体で永遠の命を享受することになると知っています。それが、「あなたがたに伝えられた良い知らせのみことば」なのです([第一ペテロ 1 章 25 節](#))。私たちが目にしていないものは一時的ですが、神のみことばに関するすべてのこと、また、私たちがそのみことばを信じた時、その

みことばによって、また神によって新しく生まれ、神の子供とされたという私たちの立場は永遠です([第二コリント 4 章 18 節](#))。このことを知っている以上、私たちがまだ生きているかぎり、同じみことばを一貫して学び、信じ、適用すべき十分な理由があります。そして、主を尊び、十分な報いを得るために、「互いに熱心に、偽善なく愛し合う」ことに励むべきなのです。それが、「あなたがたに伝えられた良い知らせのみことば」なのです。

ペテロがここで、一つの態度(愛)を用いて、クリスチャンとしての適用全体を表していることについては、少し立ち止まって考える必要があります。神が救いの後の信者に与えられた命令を実行する唯一の方法は、物質的なものではなく、霊的な対象である真理に一貫して注意を向けることです。私たちがそれを聞き、学び、信じ、それを適用することに一貫するようになって、その真理によって成長した時に結ぶ第一の実もまた、基本的には霊的なものです。もちろん、私たちのクリスチャン生活には物質的な側面や適用もあります。物質的な種とみことばの種とのこのたとえを用いることによって、ペテロは、この過程において重要なのは霊的なものであって、物質的なものではないという点を、非常にはっきり示しています(私たちが信じた時もそうであったようにです。[ヨハネ 6 章 63 節](#))。物質的な奉仕は重要です。信者に対してだけでなく、不信者への伝道においてもそうです。しかし、物質的なものはすべて滅ぼされます。ですから、物質的な要素の大きい奉仕についてさえ、霊的な側面、すなわち真理がなければ、それらは何ものでもないということ覚えておかねばなりません。なぜなら、すべての本当の奉仕の本質は、真理だからです。信者について言えば、キリストにある兄弟姉妹に対する本物の奉仕の第一の目的は、彼らに真理を与えることです(たとえば牧師教師の教えのように)。あるいは、彼らが真理を得るための手段と機会を与えることです(たとえば、教える奉仕を支援すること)。そして／あるいは、それを用いるのを助けることです(たとえば励まし、また場合によっては、物質的な必要が満たされた後に、その人たちが自身が学び、成長し、さらに奉仕できるようにするための物質的援助も含まれます)。そして、これは非常に重要なことですが、不信者への奉仕についても同じです。どれほど医療を提供し、慈善を行い、そのほかの物質的援助をしても、それだけでは不信者に永遠の益をもたらすことはできません——それが、イエス・キリストへの信仰による救いという福音のメッセージにおける神のみことばの真理を伴っていないかぎり

新しく生まれた：キリストへの信仰によって救われた者として、私たち信者が持っている祝福された立場を表す方法はいくつもあります。この箇所の初めでペテロが述べているように、私たちの命は今や「聖別された」ものとなっています。それは、神が私たちをこの世から取り分け、ご自分に属する者として、この世から特別に分離された者とし

てくださったという意味です。しかし、聖別が、排除という原則(この世、死、そして滅びからの排除)によって私たちの救いを教えているのに対して、新生は、同じ救いを包含という原則によって教えています。すなわち、私たちは今や神ご自身の家族の一員であり、神のひとり子、私たちの愛する主また救い主イエス・キリストに属することによって、父の息子、娘となっているのです。私たちは死んでいましたが、今や永遠に生きる者とされ、永遠の命を与えられています。そしてその命は、私たちの愛する主が私たちのために戻って来られる時、完全に現されるのを待っているのです。

ペテロがその直前に読者たちに語った「命の聖別」(身分上の聖別、そして私たちすべてにとってそうであることが望まれる、成長し続ける経験的な聖別)は、「真理に従うことによって」彼ら(そして私たち)のものとなっています。そして、その身分上の聖さと、絶えず成長していく行動上の聖さの目標は、すでに見たように、「偽善のない、兄弟姉妹への熱い愛」です。すなわち、キリストにある兄弟姉妹が神のみことばの真理によって信仰において成長し、前進し、そして理想的には彼ら自身も自分の奉仕に入っていくことができるよう、彼らを助け、彼らに仕える、本物の、心からの、確固とした姿勢のことです。つまり、主が私たちを取り分けられた目的は、私たち自身の救いだけに関係するのではなく、救われた後のこの人生における私たちの目的とも本質的に結びついています。そのことをペテロは、クリスチャンの中心的な徳である愛に言及することによって表現しています(私たちが心と魂と思いと力を尽くして主を愛するためには、仲間のクリスチャンを愛することが不可欠であると理解されます)。ここでペテロが、真理による聖別(22 節)と、福音における朽ちることのない永遠の神のみことばによって新しく生まれたこと(23-25 節)とを結びつけているのは、私たちに永遠の視点を思い起こさせ、そこに目を向けさせるためです。私たちは聖別されています——神の目に聖なる者とされています。そして私たちは新しく生まれています——今や神に対して生きる、神の愛する子供たちとなっています。これはまさに「良い知らせ」です。それは、福音の真理を受け入れ、キリストと、私たちのすべての罪を贖うためにキリストがしてくださったことを信じることによって、キリストの真の教会の一員となった私たちのものなのです。

しかし、話はそこで終わりません。私たちはある目的のために聖別されました。それは、成長し、前進し、実を結ぶためです(その中で私たちは「兄弟愛」を示します)。同じように、私たちが新しく生まれ、神によって神に対して生きる者とされ、キリストと一つにされたのも、まさに同じ目的のためです。何と言っても、私たちを生まれさせたのは、今日ここにあって明日にはなくなるこの世の種、すなわち朽ちる種ではありません。そうではありません。私たちは「生きて存続する神のみことばによって」新しく生まれたのです(23 節)。ですから、ペテロが私たちに理解してほしいと願っているように、この一時的な世における私たちの行いには、永遠にかかわる結果があります。そのため、私

たちの人生は、救われた日を振り返ることを中心とするものではありません(もちろん、それはすばらしい日であり、実のところ、振り返って覚えておくに値する唯一の日ではあります)。そうではなく、私たちの愛する主また救い主イエス・キリストの御前に立つ日を見据えて生きるものなのです。そして、私たちが新しく生まれるために用いられた真理のみことばと同じように、私たち自身も朽ちることのない永遠のものとなる、その永遠の将来を思うことは、私たちを喜びと切なる待望で満たすはずです([ローマ 8 章 23 節](#))。しかし同時に、キリストの裁きの座の前で将来受ける評価について、健全で神にかなった畏れを抱かせるものでもあるはずです([第二コリント 5 章 10-11 節](#))。したがって、聖別されていることには一つの責任が伴います——それは、私たちに与えられたクリスチャンとしての人生を最大限に生かすことです。同じように、新しく生まれることも終わりではなく始まりです。なぜなら、私たちに与えられたのは、あたかも私たちを生まれさせた種が一時的なものであるかのような、単なる肉体の命ではないからです。私たちは、朽ちることのない種、すなわち、神のみことばそのものであられる方、私たちの愛する主また救い主イエス・キリストから来る永遠の神のみことばによって、永遠の命を与えられたのです。そして、新しく生まれるために私たちが喜んで受け入れた真理の種が、霊的で、朽ちることなく、永遠であるように、救われた後のこの人生における私たちの優先事項もまた、霊的なもの、朽ちることのないもの、永遠のものに定められるべきなのです。

- (1) それゆえ、あなたがたはキリストと共に[立場的に]よみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられる。
- (2) 上にあるものを思い、地上のものに心を向けてはならない。
- (3) あなたがたはすでに[立場上、それらすべてに対して]死んだのであり、あなたがたの[真の]命は、キリストと共に神のうちに隠されているからである。
- (4) あなたがたの[真の]命であるキリストが[再臨の時に]現される時、あなたがたもまた、栄光のうちに現されるであろう。([コロサイ 3 章 1-4 節](#))

ですから、私たちの真の命がキリストのうちに隠されている永遠を見据えて、今の人生を生きることを決意しようではありませんか。それは、来たるべきあの偉大な日に、主が私たちを喜んでくださり、この一時的な命よりもはるかに愛しているその方から、「よくやった、良い忠実なしもべよ！」という言葉聞くことができるためです。

- (15) この世を愛してはならない。また、この世にあるものを愛してはならない。もし、この世を愛する者があれば、父への[真実の]愛はその人のうちにない。
- (16) すべてのこの世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、そして生活についての誇りは、父から出たものではなく、この世から出たものである。
- (17) こ

の世とその欲とは過ぎ去っていく。しかし、神のみこころを行う者は、永遠に[神と共に生き]続ける。(第一ヨハネ 2 章 15-17 節)

結論： 続く章で霊的成長の具体的な内容に入り、それに関連する試練への対処と奉仕という主題を扱う前に、ペテロはこの第一章の終わりで時間を取って、クリスチャンである私たちがどのように救われたのか、そして人生に対する私たちの基本的な姿勢がどのようなものであるべきかを思い起こさせています。すなわち、地上的、この世的な見方に従って生きるのではなく、神の、天的な視点から永遠を見据えて生きることです。これは非常に重要です。なぜなら、この世のあらゆる騒音と混乱の中では、かなり成長したクリスチャンでさえ、主との日々の歩みのどの時点でも気をそらされ、自分自身の問題やこの地上での生活の細々とした事柄にあまりにも心を奪われて、「全体像」、すなわち神のご計画と、その中で私たちが果たすべき役割を見失ってしまうことが非常に容易だからです。また、ペテロが地上の種と神のみことばという永遠の種とを対比することによって明らかにしているように、これは物質的な戦いではなく、**霊的な戦い**であることを覚えておくことも重要です。

(3) わたしたちは肉にあって歩んではいるが、肉に従って戦っているのではない。(4) わたしたちの戦いの武器は肉的なものではなく、要塞を打ち破るために、神によって力あるものである。(第二コリント 10 章 3-4 節)

復活の時に私たちが待ち望んでいる永遠とその報いが、現在は目に見えないものであるのと同じように、キリストが私たちの人生に定めておられる真の目的を果たすことも、同様に、何よりもまず霊的なものです。そして物質的な資源は、私たちの霊的な目的を成し遂げるために用いられるにすぎません。私たちがこの地上にいるかぎり、確かに「肉にあって歩んで」います——しかし、肉に従って歩むではありません(ガラテヤ 5 章 16-25 節)。私たちの戦いは霊的なものであり、肉の目には見えない武器をもって戦われるものです。それは御霊の賜物であり、父によって力を与えられ、聖なる御名を呼び求めるすべての人々の益のために、私たちの主イエス・キリストによって導かれるものです。「これこそ、あなたがたに伝えられた良い知らせのみことばです」(25 節)。

この世とその欲とは過ぎ去っていく。しかし、神のみこころを行う者は、永遠に[神と共に生き]続ける。(第一ヨハネ 2 章 17 節)

この世が私たちを評価したり理解したりすることは決してありません。実際、それは不可能なのです。なぜなら、私たちはより高い召しに仕えているからです。それは肉の目には見ることでできない召しであり、神の御子ご自身から私たちに与えられたものです。この世では、私たちはあらゆる種類の患難を受けることがあります(ヨハネ 16 章 33

[節](#))。そして、全世界の罪のために死んでくださった方ではなく、この世とその邪惡な支配者のほうを選んだ者たちが、私たちを愚か者以外の何者とも見なさないことは確かです([第一コリント 1 章 18 節](#); [第二コリント 6 章 14 節](#))。しかし、主イエス・キリストを信じる私たちにとって、本当に重要な唯一のこと——そして、**重要であるべき**唯一のこと——は、私たちの身代わりに死んでくださった方を喜ばせることなのです。

(16) だから、わたしたちは落胆しない。たとえ外なる人は衰えていっても、内なる人は日々新しくされている。(17) なぜなら、このしばらくの軽い患難は、比べものにならないほど重い永遠の栄光を、わたしたちにもたらすからである。(18) わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠だからである。([第二コリント 4 章 16-18 節](#))